
狐二匹の冬物語

冬空 奏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狐二匹の冬物語

【Nコード】

N5489J

【作者名】

冬空 奏

【あらすじ】

ある日、留守番中のルカは狐の娘と出会う……。
其処から、物語が始まる……。

(前書き)

注意！

※恋愛とか言ってるけど、グダグダです。
それでもへーきならどぞー！
W

今は今！、男子が3人同居してる家があったそうなの。

そのうち二人が、2泊三日の温泉旅行に行ったそうなの。

そして、ルカという女子っぽいルカリオの男の子が留守番になった
そうなの……。

そして、やはりルカも暇なので、うちの近くにある森に少しだけ行
ったそうなの。

しばらく森を歩いていると、木の近くで誰かが泣いていたそうなの……。

さて、此処から物語の始まり始まり！。

＊十狐二匹の冬物語十＊

そして、ルカはその子に近づいてみた。

おそらく、まだ幼い狐の子だと判断した。

変身途中だったのだろうか、顔が少女みtainな顔立ちで、頭からひ
よこつと耳が生えている。

毛布とは、比べ物にならない位ふさふさの尻尾もついている。無論、
黄色。

「大丈夫ですかっ？」

「だっ、大丈夫だもん！まだ、へーきだもん！」

凄く意地っ張りというか……、なんというか……。

ルカが何か言う前に、狐の子が一言。

「というか・・・何を私の事まじまじと見てるの！変態！スケベ！」
「・・・ふぁ、ごっごめんなさいっ・・・だって泣いてたから・・・」

「なっ、泣いてないっ！」

まあ、やっぱり服は着てないのである。
それはまあ、狐だからだろうが・・・。
口調と言葉と体つきで、女の子と判断。

まあ、お年頃なのだろうか胸は皆無では・・・って、何をまじまじ
見てるんだ・・・私・・・。
顔を真っ赤に染めてルカは思うのだった。

「まあ、はいっ・・・。これで少しは、寒さは防げるかなーと・・・」

「ふぁっ・・・なっ、何を・・・。」

ルカは、狐に自分の着ていたジャンパーをかける。
狐も、あったかかったのかジャンパーの中にうずくまる。

「とっ、とりあえず・・・ありがと・・・。」

「いえ、気にしないで下さい・・・。どうせですし、家まででも送
りますか・・・。」

「家は無い・・・。親も居ない・・・。」

そう言った、狐の目からはまた涙が零れそうになっていた。

「あー、じゃあ私の家までどうせなんで行きますか？」

「いつ、いい・・・。」

そんな抵抗も、ルカの耳には届かなかった。
そして、ルカは狐の子をおぶっていく。

「いいって、言ってるのに……。」

「泣いてる乙女を、見捨てる訳にはいけないので。」

ルカは、狐の言葉に笑いながらかえした。

狐は、顔を真っ赤に染めていたという。

「そういえば、名前を聞いていませんでしたね……。私はルカって言います。」

「えーと……。私はコン……。とりあえず、よろしく……。」

凄く、狐らしい名前だなー、とルカは思ったのであった。

「大丈夫ですか？ 寒くないですか？」

「だっ……。大丈夫……。」

コンは、顔を真っ赤にして言う。

そんなに、恥ずかしい事なのだろうか……。

「はいー、何とかつきましたよ。」

「ごめんね……。ずっと、おんぶしてもらって……。」

笑いながら言うルカに、申し訳なさそうにコンが言う。

まあ、何があるのが笑って「かまいませんよ」って言うんだろ
うな……。

それは、無論コンも思っていたようだ。

「まあ、外で話すのもあれなので・・・中に入りましょうか？」
「いいよ・・・ふあっ!？」

そうコンが言った瞬間、ルカが笑いながらコンの手を引っ張って家にはいる。

いつもと違って、積極的なルカなのであった。
普段なら、もう少し議論とかしてただろうに・・・。

「・・・おじゃましまあーす・・・。」

頬を膨らませて、コンが言う。

少し怒り気味なんだろうな・・・。

「紅茶とか、いります？」

「・・・砂糖入れといて・・・。」

そのまま、スネ気味な表情でコンが言う。
本当に気の難しい子だ。

「紅茶いれてきましたよー。」

「あ、ありがと・・・。」

そう言ってコンは、ルカに手渡された紅茶を急いで飲む。

無論、熱い為「げほっ!ごほっ!」という声が聞こえてくる。

そんなコンの、背中をさするルカであった・・・。

「・・・いつまで触ってるの・・・。」

「え・・・ふああ!すみません・・・あったかくて、さわり心地が
良くてとめられなくて・・・。」

「ばかあ!」

当然、その後コンに叩かれたのは言うまでも無い……。
そして、コンのおなかのむしが鳴る。

コンは当然、顔を真っ赤にする。

「何か好きな食べ物とかありますか？」

「……シチューかな……。」

「あー、じゃあちよつと待っててくださいっ。」

笑いながら、ルカは台所に向かう。

それを後ろから、不安そうにコンが見守る。

確かにそうだ……。

ルカが台所に立つ事なんてそうめったにあることではない。

それに、コンが察している通りルカは男の子である。

だから、少し不安なのだろう。

「大丈夫……なの？」

「はいっ。これ位で、コンさんの笑顔が見れるなら安いもんですっ。」

「ばっ……ばかぁ……。」

笑ってルカが言う。

コンも、耐えれずに顔を真っ赤にする。

そして、だんだんといい匂いがこちらに漂ってくる。

「はいっ。できましたよっ。」

「ほわっ、ありがと……いただきますっ……。」

「ふぁっ……美味しい……。」

「ありがとうございますっ。」

笑って横に居たルカが言う。
コン的にも、嫌な味ではなかったようだ。

「ルカ・・・は、何か食べないの・・・？」
「私は、おなかすいてないんでっ・・・そういえば、初めて名前呼んでくれましたねっ、嬉しいです。」

ルカがいつもより大きく笑ってそういった。
基本、コンは小声で呼んでいたみたいだが。

「ごちそうさま・・・。美味しかったよ・・・。」

コンが笑ってそう言った。

ルカは、少し可愛いなー・・・と思ってみていただろう。
なんせ、今日はじめてみた笑顔なのだから。

「・・・何、まじまじと見てるの？」

「・・・え、いえ！なんでも！じゃあ、食器洗ってきますっ！」

そう言って、ルカは照れ隠しの様に食器を持って台所へ走っていった。

まあ、その後焦りすぎてこけてしまったのは言うまでも無い。

「ふえー、もう19時なんだー。」

「テレビとか見てもいいですよー。」

「・・・テレビって・・・何？」

「えーと、此処のボタンを押すと映像が受信されるんです。」

「ふああ・・・凄い・・・。」

まあ、基本狐の世界にテレビなんてあるわけもないので知らないに

決まっている。

そんな質問にも、きっちり答えるルカもルカである。

そして、目を輝かせてるコンを親のように後ろから見ているルカであった。

「あー、じゃあ、お風呂でも沸かしてきますので……。」

「お風呂って何かな……？」

「えーと……。」

そして、そんな質問にも丁寧に答えるルカである。
やっぱりコンは、少し顔を赤らめていた……。

「どうせ、なんで一緒に入ります？」

「な……っ、まあ、いいけど……。」

コンは、今日の中で最も顔を赤く染めた。
ルカはいつもどおりにこにこと笑っている。

くお風呂く

「ふえー……気持ちいい。」

「そうですねー。」

コンが真っ先に言う。

ルカもそれに続いて、笑ってそう言った。

ちなみに、色んなシーンがカットされているのは中1の都合である
としてもらいたい。

「うにー……でも、のぼせそう……。」

「あー、じゃあ出ますかっ。」

く色々省略して、風呂あがりく

「そういえば、もうこんな時間なんですねー。」

「外も真っ暗・・・これじゃあ、私帰れないじゃん・・・。」

コンが少ししよんぼりしながら言う。

まあ、その後ルカが「泊まっていつて下さいっ。」と言ったのは言う間でもない。

「いいのー？・・・此処ルカだけの家じゃないでしょ？」

「えーと・・・その件につきましては、温泉旅行に行ってるので大丈夫ですよっ。」

ルカが笑って言った。

むう、とコンは顔を赤らめる。

「ほら、布団も敷きましたのでもう寝ましようかっ。」

「むぐ・・・一人はやだ・・・怖いもん・・・。」

「じゃあ、私が横で寝ますよっ。」

ルカが笑って言う。

コンもその後、ルカにつられて笑う。

やっぱり、色んな意味でルカに敵う人は居ない。

「あ、あのさ・・・。」

「何ですか？」

少し笑いながらルカが応える。

「手え・・・つないでくれてもいいかな・・・？」

顔を赤らめて、コンが言う。

真っ暗な部屋で、二人きりなのは言う間でもない・・・。

「はいっ・・・。」

しっかりと、ルカがコンの手をにぎる。

とても、しっかりといて、あたたかい・・・。

きっと、その温もりは彼の優しさなのだろう・・・。

こんな世界にも・・・こんな温もりはあるんだな・・・。

私は今まで、一人だったから・・・。

こんな温もりを私は知らなかった・・・。

彼は、きっと・・・すごく優しいのだろう・・・。

私は初めて知った・・・手のひら一つでこんなにも色々な事が分かるということ・・・。

暖房よりも・・・こたつよりもあたたかい・・・。

それは・・・彼のあたたかさだった・・・。

そして、とても安心する・・・。

こんな体験は初めてだ・・・。

しかし、残念ながら眠気に負けてしまうのが私だった・・・。

意識がほぼ飛んでいたのていまいち分からなかったが、彼が私の方を見て、にこっ・・・と笑っていた。

その日、私はこんな夢を見た・・・。

何も無い世界に來た夢だった・・・。

何もない・・・。そして、見渡す限り私一人・・・。

私は、泣き崩れた・・・。

また一人に戻ってしまったのだから・・・。

一人・・・孤独なんて嫌だ・・・。
もう何年もそれを経験してきたのだから・・・。
やっとなんか・・・誰かと出会えたのに・・・。
それなのに・・・また最初から・・・。
また・・・あんな悲しい生活を・・・。
そう思いながら、下を見ると・・・包丁が落ちていた・・・。
私は、また悲しい生活に戻るなら・・・いっそ死んでしまった方が
ましだと思った・・・。
そして、私は包丁を持って自分に刺そうとした。
その時だった・・・。

「自殺なんて、しちゃダメです・・・。」

後ろからそんな声が聞こえた・・・。

彼の声だ・・・。

「なんで・・・？また、一人になるんだよ！？また生き地獄になる
んだよ！？・・・それなら・・・それなら・・・。」

私が泣きながら、彼に訴えると彼は私に優しく言ってくれた。

「大丈夫ですよ・・・私はいつでも、コンさんの側に居ます・・・。」

そう言って、私を背後から抱きしめた。

全体に彼の優しさを感じた。

あったかい・・・。

夢の中なのに・・・何も感じないはずなのに・・・。

自然と涙が溢れてくる・・・。

いつも・・・側に居てくれるんだよね・・・。

じゃあ、ずっと私は一人じゃないんだよね・・・。
そう・・・そんなことを思っていたら・・・目が覚めたのだった。

「あっ、おはようございます。」

彼は笑ってそう私に言った。

何故だろう・・・やっぱり、泣きそうになる・・・。
私はこらえきれず、彼に抱きついて思う存分泣いた。

「コンさん、どうしたんですか？」

「ひぐっ・・・何でもない・・・。」

「まあ、詳しくは聞きませんが・・・泣きたい時には、泣けばいい
ですからね？」

そう言って、彼は泣いてる私の頭を撫でてくれた。

不思議と嫌な感じはしなかった・・・。

きっと、サイショなら嫌がっていたのに・・・。

なんでだろう・・・私は彼に惚れたのかもしれない・・・。

「コンさん・・・残念ですが、私ともうすぐお別れです・・・。」

「へ・・・っ？」

私は彼の言葉が信じられなかった・・・。

その時は、本当に泣き崩れた・・・。

彼も私も・・・。

「悲しいよ・・・っ。せつかく一人じゃなくなったのに・・・。」

「私です・・・。でも、きっと・・・私と会ったことを後悔しな
いで下さい・・・。だめ・・・ですか？」

彼が、弱弱しい声でそういった。

「うん・・・分かった、約束する・・・。」

「そして、コンさんは一人じゃないです・・・私はいつでも、コンさんの側に居ます・・・。」

夢の中と同じ台詞だ・・・。

私は、涙が止まらなかった・・・。

嬉しくて、悲しくて・・・。

「いつでも、側に居てくれるんだよね・・・？これで、私は寂しくないねっ・・・。」

「ずっと・・・ずっと・・・一緒です・・・。」

そう言って彼は、私の唇に自分の唇をつけるのであった・・・。
私は凄く恥ずかしかった・・・。
でも、嬉しかった・・・。

「これが最後のお別れです・・・。」

「酷い・・・私、ファーストなのに・・・。」

「私もファーストですから・・・。」

くすつ、と彼は笑った・・・。

私は、酷いとか言いながら・・・本当の気持ちは凄く嬉しかった・・・。

本当に迷惑をかけていたのに・・・。

彼は、何も言わずに笑って接待をしてくれた・・・。

「じゃあ、さようなら・・・。」

「ばいばいっ・・・。」

彼は、別れ際も笑っていたが少量の水の粒がキラリと光って地面に落ちた。

私は、やっぱり泣き崩れた……。

「ただいま……あれ？ルカ……何かあったの？」
「おかえりなさい……い、いえ！何もありませんよっ。」

ブラの問いかけにも、笑って応えるルカであった……。
しっかりと、笑って……いつものように……。
何も無かったかの様に……。

「……今でもずっと、側に居るんだよね……。」
「あれから、君にずっと恋をしてるんだよ……。」

私は、少しだけ泣きながら一人……いや、彼に向かって言った。
そう……ずっと、彼に恋をしてるんだよ……。
また……会えるから……。
……じゃなかった、いつでも彼は側に居てくれるんだった……。
私は、言ってしまうとまた一人に戻ってしまった……。
でも、彼は言ってくれた。

いつでも側に居る……と。

だから、一人でももう寂しくない……。
これからはいつでも……彼が居るんだから……。
そして、そんな時私は、あの時感じた温もりをまた……不思議と
感じたのであった……。

生涯いつも、あの人の事は忘れない……。
あの人と会った事は後悔しない……。
私は、自分の口で言ってみた……。

「ありがとう・・・。」

私は、彼に言ってみた・・・。

聞こえてないだろうけど、分からないだろうけど・・・。

私は、ずっとアナタに感謝していたし・・・恋していたんだよ・・・。

本当に・・・ありがとう・・・。

T H E E N D

（後書き）

あー・・・力尽きたよ・・・。

ルカ「情けない作者ですね（汗）」

いやー・・・本当に（汗）

コン「読者の皆様もこんな作者みたいにはならないでね（汗）」
ルカ「本当になっちゃだめですよ！」

失礼だなあ（汗）

まあ、また次回・・・何かの小説でお会いしましょう。

ルカ「適当ですよね（汗）」

いいじゃん！人間だし！

コン「・・・狐火！」

ギヤアアア！なんか、異様に熱い！

ルカ「それではー。」

コン「ばいばーい。」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5489j/>

狐二匹の冬物語

2010年10月10日16時49分発行